2025

HARVARD-YENCHING

INSTITUTE WORKING

PAPER SERIES

自伝的民族誌的フィクション：多言語社会日本における
アリスの冒険

AUTOETHNOGRAPHIC FICTION: ALICE'S ADVENTURES IN MULTILINGUAL JAPAN

Aoyama Waka | The University of Tokyo

自伝的民族誌的フィクション：多言語社会日本におけるアリスの冒険
Autoethnographic Fiction: Alice's Adventures in Multilingual Japan

Waka Aoyama (The University of Tokyo)

Abstract: These essays are the first drafts of the chapters for an autoethnographic fiction titled *Fustuno Maruchiringaru (An Ordinary Multilingual)*, scheduled for publication in 2027. From June 2024 to February 2027, approximately 20 chapters, including a prologue and an epilogue, are planned to be written in Japanese. The work is based on the author's personal experiences and follows a character named Alice, born and raised in Japan, whose first language is Japanese. The story portrays Alice's everyday use of multiple languages. While Japan is often misunderstood as a "monolingual society," the work shows that it is, in fact, a "multilingual society," and it challenges the concepts of "ordinary" and "equality" in postwar Japan from the perspective of language use. Themes such as diversity, coexistence, colonial and wartime aggression, and the power of language are explored, with a narrative of homeland loss and regeneration. The work encourages critical reflection on our unawareness of the privilege of "Japanese" and "English" and the linguistic hierarchies we live with, aiming to bring out the reader's own "language stories." Grounded in critical metalinguistic awareness, it seeks to explore the possibilities of creating a socially just world. In order to prepare for the publication of a future English edition and to explore the impossibility of translation, English translations of all chapters are included.

Keywords: Multilingual Japan, Language Use, Being Ordinary/Normal and Egalitarianism, Colonial and Wartime Aggression, Critical Metalinguistic Awareness

要約：これらのエッセイは、2027 年度に出版予定の『ふつうのマルチリンガル』という自伝的民族誌的フィクション作品の各章の初稿である。2024 年 6 月から 2027 年 2 月にかけて、プロローグ、エピローグを含む約 20 章が日本語で執筆される予定である。本作では、著者自身の経験に基づき、日本生まれ日本育ち、母語が「日本語」であるアリスという人物が、日常的に多言語を使う様子を描く。日本が「モノリンガル社会」と誤解されがちである一方、実際には「マルチリンガル社会」であることを示し、戦後日本における「ふつう」や「平等主義」を言語使用の観点から問い直す。多様性、共生、歴史的加害性、言葉の力をテーマに、故郷喪失と再生を描く。とくに「日本語」や「英語」の特権性や言語的ヒエラルキーに無自覚なわたしたちに対する批判的反省を促し、読者自身の「言語の物語」を引き出すことを目指す。批判的メタ言語意識を軸に、社会的公正な世界への可能性を探る一冊である。将来の英語版の出版に備えるために、また翻訳不可能性を探るために、全章の英訳を付す。

キーワード: マルチリンガル社会としての日本、言語使用、ふつうと平等主義、歴史的加害性、批判的メタ言語意識

自伝的民族誌的フィクション：多言語社会日本におけるアリスの冒険

東京大学東洋文化研究所
青山和佳

１　札幌 Sapporo 「アメリカ」の明るい呪縛

お日さまからの風

生まれたとき、おとうさんは「アメリカ」で白人の赤ちゃんをだっこしていた。

わたしは、その昼、どうしてこんなに生まれるのに時間がかかっちゃったのかなあと思いながら、北海道大学病院の新生児室のベッドに寝かされていた。なんでも、おかあさんは、いろいろな管につながれ、白衣を着たたくさんの人たちが入れ替わり立ち替わりやってくるなか、三日三晩、息もたえだえに、わたしが生まれくるのを待っていたそうだ。おとうさんは、おかあさんが入院する前日に、「アメリカ」と呼ばれる場所へ飛んでいってしまっていた。おかあさんのおかあさん、つまり、わたしのおばあちゃん、と、おかあさんのおとうさん、つまり、わたしのおじいちゃんが、生まれたばかりのわたしに会いに毎日のように病院に来てくれた。

まわりはまだよく見えないけれど、おかあさんの声は生まれる前から聴こえていたし、おばあちゃんやおじいちゃんの声もよく聴こえていたので、ああ、わたしは、この人たちのところに生まれ落ちるのかな、と思っていたら、やっぱりそうだったのか。もちろん、じっさいに生まれるまでは、どの声がだれの声なのか、ぜんぜんわからなかったし、そもそもそれが声というものだということも知らなくて、なんていうか、わたしの世界を満たしている音楽のようなもので、こんなに狭いところに羊水に包まれて居るのに、大空がひらけてそこに揺らめくオーロラとして現れることにいつも目を見はっていた。瞼はずっと閉じていたはずなのに。いろいろな色、いろいろな律動、お日さまからの風。

おとうさんは、とうきょうの大学を卒業して、おかあさんと結婚した。おとうさんの両親が反対したので、ふたりは駆け落ちして、おかあさんの両親のもとに身を寄せた。反対されたのは、おかあさんが「たんこうふ」のむすめだったからだ。たんこうふというのは、鉱山で働くひとのことで、おじいちゃんは石炭を掘るために、芦別（あしべつ）で、みついという大きな会社にやとわれていた。おじいちゃんは肺をいためたので山に入れなくなり、時計屋さんをひらいた。そのころのたんこうまちはとても豊かで時計も飛ぶように売れ、たくさん儲かったので、札幌に引っ越して、おばあちゃんはおかあさ

んとその妹（アッコちゃん）をとうきょうの大学に行かせることにした。おかあさんはそこでおとうさんに見初められたのだった。

おとうさんは、工学という学問を志して、北海道大学の大学院を受けたけれども落ちてしまった。めげることなく、さまざまな資格の取得をめざして勉強していて、なかでも熱心だったのが、えいごを勉強することだった。ああ、それで。おかあさんのおなかにいるときに現れるオーロラは、柔らかいピンク色のことが多かったけれど、ときどき、緑がかった青色がゆらゆらすることがあって、ふしぎだなあって思っていたのだけれど、あれは、おとうさんがえいごを練習したり、遊びでおなか（わたし）に話しかけたりしているときに奏でられていたのかな。リズムの強弱がはっきりしていて、それでいて、流れが途切れることがない、あのおおらかな川のようなシンフォニー。

「アメリカ」への恋

おとうさんは、「若いひとたちのキリスト教徒の集まり」（わいえむしーえい、というらしい）のえいご教室に通っていたけれど、イエス・キリストによって示された愛と奉仕の生き方に関心をもっていたわけでもないし、このそしきが札幌農学校でクラーク博士から聖書の教育を受けた学生たちによって始められたこともよく知らなかった。そのミッションを読んだとき、自然をかけがえのないものと自覚し、人間とさまざまな命が共に生きていくことをめざす、というのは、いいなあ、とこころを動かされた。おとうさんは、がくせいのとき、めずらしい蝶を見つけて新聞の記事になったり、高山植物の標本をつくったり、ほんとうだったら、生物学者になりたかったひとだ。

おとうさんは工学を学んでいて、工学っていうと、イギリスのさんぎょうかくめいではないけれど、どんどん機械をつくって、自動車とかね、外国に売って、いっぱしの工業国になる、それが豊かになるってことでもあるのだよ、って言われていたけれど、おとうさん自身は、いやいや、農業もたいせつでしょう、毎日の食べものどうするつもりですか、農業にも機械や工業製品がどんどん使われるようになって、そういうときに、土や土のなかの生きものたちが痛めつけられたり、水や空気がよごれたり、風景がうしなわれたりしてしまったら、とりかえしがつかないでしょう、だから、ぼくは、工学なのだけど農業をやります、農業土木学をやります、って、熱いおもいを抱いていた。

えいごの勉強に打ち込んでいたのは、「アメリカ」に夢中だったからだ。おとうさんには、スキがあった。好きと、隙の、りょうほうだ。

一九六四年、おとうさんはおかあさんといっしょに、とうきょうでオリンピックを見た。

エチオピアから来たアベベというマラソン選手がものすごい速さで駆け抜けていく姿に、はたして届いているだろうかと思いながらもえんどうから懸命に声援をおくった。その年の三月に大学を卒業したおとうさんにとって、オリンピック以上にこころがはずんだのは、日本人が観光のために海をこえて旅をすることがゆるされたことだった。パスポートをとって、いつか「アメリカ」に行く。「アメリカ」が好きだ、理由はよくわからない。きみが好きだ、理由はよくわからない。ほんとうに好きってそういうことなのではないだろうか。おとうさんはおかあさんにプロポーズした。

えいごは「アメリカ」で、「アメリカ」は「世界」だった。

おとうさんのいう「アメリカ」には、メキシコやブラジルやペルーやパナマやニカラグアやエクアドルやコスタリカやボリビアやホンジュラスやアルゼンチンやカリブ海に浮かぶたくさんのしまじまなどは想像されていないし、それどころかカナダすら想像されていなくて、それはつまり、「アメリカ合衆国」という、にほんがアジア太平洋の国ぐにを侵略し、植民地支配し、戦争し、敗れて、一九四五年から、れんごうこくぐんさいこうしれいかんそうしぶ（じーえいちきゅー、あるいは、しんちゅうぐん）に占領されるようになったときに、まんなかに、というよりは、まうえに立つようになった、ひとつの国家のことだったのだけれど、おとうさんにとっては、それはまばゆい星のような存在だった。

ドメスティック、コスメティック、プラスティック

おかあさんは、えいごが、苦手だった、すごく、苦手だった。

おばあちゃんの言いなりに、とうきょうの大学に行くことになったとき、お勉強はどれもきらいだけれど、どうしても選ばなくてはならないなら、文学部しかないな、でも、英文科はありえない、えいごがきらいすぎる、そもそもアルファベットからして未知の荒海すぎる、だとすると、国文科？　でも、おかあさんが読んだり書いたりできるのは、ふつうのにほんごだけだから、古典とかぜったいできないし、近代文学、えーと、近代文学って、明治時代からだっけ、なつめそうせきとか、そうそう、そういう小説を読むのは好きだから、しょうじき、子どものときから勉強ができない自分が大学に行くなんてありえないけれど、しかたがない、とかんねんしたらしい。

とうきょうでは、同じ学科のおともだちもできて、毎日いっぱいおしゃべりして、楽しく暮らしていた。あとから上京してきた、おかあさんの妹は、まじめにんげんで、いつも勉強していて、やくざいしをめざしていたから、おかあさんが、まいにちまいにち、

デパートに化粧品を買いに行ったり、流行の映画を観に行ったりすることをみとがめてきたけれど、おかあさんは、そんなことはどこ吹く風だった。そんなおかあさんだったけれど、ゼミナールにはちゃんと通って、佐田稲子の『キャラメル工場から』について論文を書くこともできたし、あとは、落としつづけていた、えいごの単位さえとれれば卒業できるところまで漕ぎつけた。

だけど、これが、なかなかとれなかった。四年間、おなじ科目のおなじ試験に落ちつづけ、おなじ追試に落ちつづけた。ほかのみんなが悠悠と合格しているのに、おかあさんだけがどうしても点数がたらない。アルファベットは、この世の終わりを告げるあくまの呪文にしか見えなくなってきた。教授も困り果てて、さいごはレポートを提出すればよいことになり、おとうさんが手伝って、というよりも、しょうじきにいえば、ほぼ、ぜんぶのめんどうを見てくれて、できすぎにならないように気をつけながら、書いてくれて、とうとう、えいごの単位をとることができたのだった。おとうさんは大学の先輩で、おかあさんが卒業したら、結婚するやくそくをしていた。

おかあさんは「アメリカ」に興味はなかったけれど、おとうさんが「アメリカ」が大好きなことは知っていたし、「アメリカ」に行くために、えいごを習いつづける姿をみながら、このひとはほんとうにお勉強が好きなのね、自分とはぜんぜんちがうな、どうしてこのひとが自分にひとめぼれしたのかぜんぜんわからないけど、なんだかいいな、とドキドキした。おかあさんは「アメリカ」に興味はなかったけれど、ミチコという自分と同じなまえのとうだいの女学生があんぽとうそうのデモで警官隊とはげしくぶつかって亡くなったことをよくおぼえていた。おなじなまえで皇太子妃になるひともいたし、水俣病についてしょうがい語りつづけるひとももでてくることになる。

冷戦なのに、スパシーバ

おかあさんのおなかのなかにいたときに見えたオーロラのなかに、もうひとつ、ふたつ、んん？　となる、色合いとリズムの波があった。生まれてからわかったのだけれど、それは、おじいちゃんとあっこちゃんがときどきさえずる、えいごとは別の言の葉が織りなすものだったらしい。

おじいちゃんが、その言葉をおぼえたのは、もっぱら耳からだった。

おじいちゃんのおとうさんとおかあさんは「東北」に生まれて、アイヌモシリであったはずの「北海道」の「上富良野」（かみふらの）に「開拓」のために移住してきた、まずしい農民だったのだけれど、そこでそだったおじいちゃんはおばあちゃんとイトコ同士

の結婚をして、おじいちゃんのお兄さんに誘われるままに、アイヌモシリであったはずの「樺太」（からふと、[さはりん]とも言う）にわたった。ウィルタやニヴフなどの人びとがそこに暮らしていたはずなのに、「日本人」がたくさん「殖民」していた「柵丹」（さくたん）に移住して、おじいちゃんは大きな会社が経営するたんこうでまいにち地中にもぐり石炭を掘ってお金をかせいでいた。戦争のあいだもずっと掘りつづけていた。朝鮮から連れてこられた人たちもたくさん働かされていた。

ソ連軍が侵攻してきたあとも、おじいちゃんは同じたんこうで地中にもぐり石炭を掘りつづけたのだけれど、「日本人」ではなくロシア人の命令をきかなければならなくなった。ぎょくおんほうそうをきいて、戦争が終わったこと、日本が負けたことはわかったけれど、すぐには引き揚げられなかった。そもそも、どこに引き揚げたらよいかもわからなかった。「北海道」に残っている家族などいなかったし、親族との連絡も途絶えていたからだ。ロシアの言葉は、おじいちゃんのからだに少しずつ染みていき、それはしょうがい消えることなく、のちにひまごのアテナが生まれたときも、わたしがえいごで話しかけているよこで、ロシア語を聖水のように振りかけるのだった。

あっこちゃんの場合、その言葉をおぼえたのは、目からだった。

あっこちゃんは、おかあさんと二歳はなれた妹で、わたしが生まれるときには、もうとうきょうの大学を卒業して、薬剤師の免許をもっていた。あっこちゃんは、小さいころからがくぎょうゆうしゅうで、それはひとつには、見たものを映画のように記憶することができて、教科書などは配られたその日に、見たいよ知りたいよ、と、何かに取り憑かれたようにすべてのページをあっという間にめくりとおし、つまり机に向かっていて一ミリも動かずにいるのに一億光年の旅をしてありとあらゆる星屑を吸い込んで帰還するということをなんなくやってのける子どもで、そのまま大人になることができたひとだったからだ。ぽや〜っとしているのに、口を開けたら宇宙なのだった。

薬学部では、週に三コマ、ドイツ語の授業があった。基本的な語彙や文法は学ぼうと思うよりもさきに身についてしまったから、あっこちゃんは図書館にいってかたっぱしからドイツ語の論文を読みあさり、わからないことがあると、ドイツに留学していたことのある教授に質問にいったりして、あたまのなかにドイツ語の森をわさわさと繁らせていった。ドイツ人の先生の話すドイツ語はさいしょ、ききにくかったけれど、ラジオ講座をききつづけて、自分でも歌うようにくりかえしているうちに、だんだんとわかるようになっていって、あたまのなかの森には、よろこびの歌が鳴り響くようになり、いまや、彼女が酔っ払いの歌と呼ぶ、シューベルトの「酒の歌」(Trinklied)さえも歌えるようになっていた。

わたしがおかあさんのおなかのなかにいたとき、あっこちゃんは、ドイツ、そう、れいせんのさなかだったので、「西ドイツ」にある大学に国から奨学金をもらって留学するための支度をすすめていたのだった。パスポートをとったので、ヨーロッパにわたるまえに、「沖縄」にも旅行しようと思っていた。

いちご畑、おばあちゃんの魔法

Unya、もう一回、言わせてね。
オーケイ、let me say it again.

生まれたとき、おとうさんは「アメリカ」で白人の赤ちゃんをだっこしていた。
Pagkatawo nako, naggakos diay ug puti nga bata ang akong papa didto sa 'America'.

このことを、わたしは大きくなってから、おとうさんが大切にスクラップしていたえいごの新聞の記事で知ることになる。おとうさんたち訪問団の一行は、ワシントン州のとある町で地元の人びとから歓迎されて、そこで記念写真をとることになり、ベティさんというガイドさんから、生まれたばかりの赤ちゃんがいるので抱いたらどうかとすすめられたのだと言う。おとうさんが、そのとき、自分にももうすぐ生まれる子どもがいると言ったのかどうかはわからない。見たかんじでは、札幌から来たおとうさんたちは全員が男性で、歓迎してくれている地元のひとたちには男性以外もいたけれど、全員白人だった。しろくて、ゆたかな、「アメリカ」という呪いが明るく輝いていた。

おばあちゃんは、自覚のない、魔法使いだった。

初孫であるわたしの誕生を喜んで、たたみ一枚くらいの大きさのいちご畑をつくってくれた。一歳の誕生日を迎えた七月のある日、マドラスチェックのビキニを着せられていちご畑にすわらされたわたしは、小さな手でいちごをつかみとって、土のついたまま食べてしまった。おばあちゃんのいちごは呪いを解くから、わたしは、しょうらい「アメリカ」にすくなくとも五回わたり、そのうち二回は長期にわたるかもしれないけれど、そこに永住することは決してなく、アジアにゆかりの深い一生をおくることが運命づけられたのだった。おとうさんが「アメリカ」から持ち帰ってきた絵本によって、えいごに包まれはじめていたけれど、おばあちゃんの呪力のほうが果てしなかった。

しんちゅうぐんから流れてきた時計をあつめて、おじいちゃんがそれを修理して、おばあちゃんがお店で売りさばいて、おかねが箪笥の引き出しから溢れるほど稼いだけれど、

ふたりともがっこうというものに縁がなかった。生きのびるために、上富良野、柵丹、芦別、そして札幌とめまぐるしく動きまわりつづけ、働きつづけてきたから、がっこうで勉強らしい勉強というものをしたことがなかった。おじいちゃんにとって、がっこうはどうでもいいものだったけれど、おばあちゃんにとって、それは幼いときからどうしても行きたくてたまらないのに行くことができない、あこがれをとおりこして恨みのあるものだった。恨みというものは、運命をつくることがある。

おとうさんが「アメリカ」から帰ってきたとき、おばあちゃんはインスタントコーヒーを淹れて、とっておきのカステラを出してあげた。おとうさんにはまだちゃんとした仕事がなかったけれど、おばあちゃんはおとうさんが大学でたいへんな秀才だったことを誇りにおもっており、向こうの両親の反対をあっさりとかわして、やあ、どうも、ぼくたち結婚しました、よろしくおねがいします、と、ごく自然にここに住むことになったことも好ましくうけとめていた。おとうさんはニコニコしながら、カステラをたいらげ、おばあちゃんとおじいちゃんを車に乗せて、まだ病院にいる、おかあさんとわたしに会いに、春楡の青青とした緑の葉がおいしげる大学のキャンパスに向かっていった。

Autoethnographic Fiction: Alice's Adventures in Multilingual Japan

Institute for Advanced Studies on Asia, The University of Tokyo
Waka Aoyama

1 札幌 Sapporo, the bright spell of "America

Wind from the sun

When I was born, Dad was carrying a white baby in "America".

That afternoon, I was lying in a bed in the neonatal ward of the Hokkaido University Hospital, wondering why it had taken so long for me to be born. I heard that my mother had been connected to various tubes and waited for three days and three nights, breathless, for me to be born, while many people in white coats came in and out of the room, one after another. The day before my mother was hospitalized, my father had flown to a place called "America." My grandmother, or my mother's mother, and my grandfather, or my mother's father, came to the hospital every day to see me as a newborn baby.

Although I could not yet see my surroundings well, I could hear my mother's voice even before I was born, and I could hear my grandmother's and grandfather's voices as well, so I thought, "Oh, I am going to be born to these people. Of course, before I was born, I had no idea whose voice was whose, and I didn't even know that it was a voice at all, but it was like music that filled my world, even though I was surrounded by amniotic fluid in such a small space, I was always transfixed by the sight of the sky opening up and appearing there as a shimmering aurora borealis. My eyelids were supposed to be closed all the time. Various colors, various rhythms, wind from the sun.

Dad graduated from a university in Tokyo and married Mom. The father's parents were opposed to the marriage, so the two eloped and moved in with the mother's parents. The reason they objected was because she was the daughter of a "tankofu". “Tankofu" refers to people who work in mines. Grandpa was employed by a large company called Mitsui in Ashibetsu to dig for coal. Grandpa couldn't go into the mountains because of a lung disease so he opened a watch shop. The coaling town was very rich at that time, and watches sold like hotcakes, so Grandma decided to move to Sapporo and send Mom and her sister (Akko) to a university in Tokyo. There, she met my father, and he fell for her at first

sight.

Dad applied to graduate school at Hokkaido University to study engineering, but was unsuccessful. Undeterred, he studied hard to obtain various certifications, and one of his passions was learning English. Oh, and then. The aurora that appeared when I was in my mother's womb was often a soft pink color, but sometimes a greenish blue color would appear, which I thought was strange. I wondered if they were played when my father was practicing his English or talking to my mother's tummy (me) for fun. A symphony, bold and rhythmic, yet flowing endlessly like that grand, generous river.

Love for "America"

My father attended an English class at a "young Christians' group" (called YMCA), but he was not interested in the way of life of love and service shown by Jesus Christ, nor did he know that this organization was started by students who received their Bible education from Dr. Clark at the Sapporo Agricultural College. When he read the mission statement, he was moved by the idea of realizing the irreplaceability of nature and aiming for the coexistence of human beings and various forms of life. When he was a student, my father found a rare butterfly and wrote a newspaper article about it, and he also made specimens of alpine plants. He's someone who would have loved to become a biologist.

My father studied engineering. Engineering would remind us of the British industrial revolution, and that it would make us become a fully industrialized country by making more and more machines and selling cars and other products to other countries, and that this would make us rich. That's true. But I also believe that if machines and industrial products are used more and more in agriculture, the soil and the living creatures in the soil will be damaged, the water and air will be polluted, and the landscape will be lost, and there will be no way to recover. That is why I am so passionate about doing agriculture and agricultural civil engineering, even though I am an engineer. That's what he was thinking.

He was devoted to learning English because he was crazy about "America". My father had a love. He had both a love and a vulnerability[1].

---

[1] In the original Japanese text, a play on words is used with the homophones *suki* (好き, meaning "like" or "love") and *suki*(隙, meaning "gap" or "vulnerability"). Both words share the same pronunciation: /sɯ̥ki/.

In 1964, Dad and Mom watched the Olympics in Tokyo. They cheered for Abebe, a marathoner from Ethiopia, as he ran at an incredible speed, even though he wondered if he was reaching the finish line. For my father, who graduated from college in March of that year, what was even more exciting than the Olympics was that Japanese people were allowed to travel across the sea for sightseeing. I will get a passport and go to the U.S. someday. I like "America", I don't know why. I like you, but I don't know why. I think that's what it means to really like someone. Dad proposed to Mom.

English was "America" and "America" was "the world".

The "America" as Dad calls it does not imagine Mexico, Brazil, Peru, Panama, Nicaragua, Ecuador, Costa Rica, Bolivia, Honduras, Argentina, or the many islands in the Caribbean Sea, or even Canada, for that matter. It refers to the "United States of America," the nation that came to occupy Japan—positioning itself both at the center and above Japan—after Japan invaded and colonized countries in the Asia-Pacific region, waged war against the Allied Powers in the same region, and eventually lost, coming under the control of the General Headquarters of the Allied Powers (GHQ, or the Occupation Forces) from 1945. However, to my father, it was like a dazzling star.

Domestic, Cosmetic, Plastic

My mother was not good at English, very, very poor at English.

If I had to choose, I would have to go to a university in Tokyo, according to my grandmother's advice, but I don't like any of the subjects I have to study, Japanese Literature? But since I can only read and write in contemporary Japanese, I can't do classics, and I like reading modern literature, let's see, modern literature starts from the Meiji Era, right? Mom thought it was impossible for her to go to college, but she had no choice but to do so.

In Tokyo, Mom made friends in the same department, and they chatted a lot every day and lived happily. Mom's younger sister, who came to Tokyo later, was a serious person, studying hard and aspiring to become a pharmacist, so she always scolded Mom for going to department stores day after day to buy cosmetics and see trendy movies. But she didn't care about any of that. She was able to attend the seminar and write a paper on Ineko Sata's "From the Caramel Factory," and she was on track to graduate as long as she could earn her English credits, which she had been failing for some time.

But Mom couldn't get them. For four years, she kept failing the same test in the same subject, and kept failing the same follow-up exam. While everyone else passed with flying colors, my mother was the only one who could not get a sufficient score. The alphabet began to look like an evil spell that would spell the end of the world. The professor was getting tired of it, and finally decided that the only thing left to do was to submit a report. My father was a senior in college, and he had promised to marry my mother once she had graduated.

Mom was not interested in "America," but she knew that Dad loved "America," and as she watched him continue to learn English to go to "America," she thought, “he really liked studying, that he was very different from me. I had no idea why he had fallen in love with me at first sight, but I liked him. I can feel my heart racing”. Although she was not interested in "America," she remembered well that a female student with the same name as hers, Michiko, had died in a violent collision with police during a demonstration for the Anpo Toso (Anpo Protests)[2]. Another person with the same name would become the Crown Princess of Japan, and another person would continue to speak out about Minamata disease.

спасибо (thank you) in the midst of the Cold War

Among the auroras I saw when I was in my mother's tummy, there were one or two waves of colors and rhythms that made me think, “How mysterious!” I found out after I was born that they were different kinds of language from English that Grandpa and Akko sometimes chirped.

Grandpa learned that language solely from his ears.

Grandpa's father and mother were born in the Tohoku region of Japan and moved to Kamifurano in Hokkaido, which was supposed to be an Ainu village, for "pioneering" purposes. His brother invited him to go to Karafuto (also called Sakhalin), which was supposed to be an Ainu territory. The Wirta and Nivkh people were supposed to have lived there, but they moved to Sakutan, where many "Japanese" settlers were "colonizing" the land. Grandpa earned money by digging for coal every day in the ground at a mining owned by a large company. He continued digging even during the war. Many people brought from Korea were also forced to work there.

[2] The Anpo protests were a series of political demonstrations in Japan during the 1960s, opposing the U.S.-Japan Security Treaty.

After the Soviet invasion, Grandpa continued to dig for coal in the same way, but he had to take orders from the Russians instead of the Japanese. After listening to the radio broadcast, he knew that the war was over and that Japan had lost, but he could not immediately return to his home country. In the first place, he did not know where to go. There was no family left in "Hokkaido," and he had lost contact with my relatives. The Russian language gradually seeped into Grandpa's body, and it did not disappear until later, when his great-granddaughter Athena was born.

In Akko-chan's case, it was from her eyes that she learned that language.

Akko-chan was my mother's younger sister, two years younger than her. By the time I was born, she had already graduated from university in Tokyo and had obtained her pharmacist's license. Akko-chan had always been outstanding academically since she was little. One of the reasons for this was that she had the ability to remember things she saw as if they were scenes from a movie. She would breeze through textbooks and materials on the very day they were handed out, turning every page in a flash as though possessed by a desire to "see and know everything." Even though she would sit at her desk without moving a millimeter, it was as if she were embarking on a journey of a billion light years, absorbing all the stardust and returning effortlessly. She never lost this ability, even as she grew up. She would seem absent-minded, but when she opened her mouth, it was as though the universe itself had unfolded.

At the department of pharmacy, there were three German classes a week. Since she had acquired basic vocabulary and grammar before she thought of learning them, Akko went to the library and read every article in German she could find, and when she did not understand something, she would ask a professor who had studied abroad in Germany. She was able to grow a forest of German in her head. At first, it was difficult for her to understand the German spoken by the German professor, but as she continued to listen to the radio lectures and sang the German songs repeatedly, she gradually began to understand the language. She could even sing Schubert's "Sake no uta (Trinklied)," a drinking song.

When I was in my mother's womb, Akko-chan was preparing to study abroad in Germany—yes, during the Cold War, so she was planning to go to a university in "West Germany" with a scholarship from the government. She had just gotten her passport, so before crossing over to Europe, she was also thinking of traveling to Okinawa.

Strawberry fields, grandma's magic

Unya, mou ikkai iwasete ne.
Okay, let me say it again.

When I was born, Dad was carrying a white baby in "America".
Pagkatawo nako, naggakos diay ug puti nga bata ang akong papa didto sa “America”.

I learned about this from an article in an English-language newspaper that my father had carefully scrapped when I was growing up. The group was welcomed by the local people in a town in Washington State, where they were photographed by a guide named Betty, who suggested that Dad hold a newborn baby in their arms. I am not sure if the father told her that he had a baby on the way. From what I saw, the group from Sapporo were all men, and the locals who welcomed us were all Caucasian, although some of them were not men. The curse of "America" was shining brightly.

Grandma was an unaware, wizard.

She was so happy to see me, her first grandchild, that she built a strawberry patch the size of a sheet of tatami mat. One July day on my first birthday, I was made to sit in the strawberry patch wearing a madras-check bikini, and I grabbed a strawberry with my tiny hands and ate it with the dirt still on it. My grandmother's strawberries broke the curse, and I was destined to travel to "America" at least five times in the future, two of which might be for long periods of time, but never to live there permanently, and to spend the rest of my life with a strong connection to Asia. The picture books my father had brought back from "America" had begun to envelop me in English, but my grandmother's spell was more endless.

Grandpa and Grandma collected clocks from the Shinchugun (the U.S. Occupation Forces), Grandpa repaired them, Grandma sold them in her store, and they earned so much money that their chest drawers were overflowing. Neither of them attended any school long enough to recall. They had to move around so fast from Kamifurano, Fentan, Ashibetsu, and Sapporo to survive, and they had to work so hard that they never really studied at school. For Grandpa, school was not important, but for Grandma, it was something she had longed to go to since she was a child, but could not. Resentment can create destiny.

When Dad came back from "America," Grandma made him a pot of instant coffee and served him her favorite sponge cake. She was proud of the fact that he had excelled in college, even though he didn't have a real job yet, and she liked the fact that he had easily overcome his parents' objections, and that he came to their house, saying in an unbelievably natural way, "Hi, hi, we got married, thank you for letting us live with you". Dad smiled, ate his sponge cake, and drove Grandma and Grandpa to meet Mom and me, who were still in the hospital, on the campus of the university, where the green leaves of the spring elm trees were still fresh and lush.